

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

「事例媒介的アプローチ」による個別事例分析は何を生み出すのか：『事例分析への挑戦』の特性と意義

著者	井腰 圭介
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	64
号	4
ページ	77-87
発行年	2018-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/13838

「事例媒介的アプローチ」による個別事例分析は何を生み出すのか

——『事例分析への挑戦』の特性と意義——

井 腰 圭 介

0. 問題の所在

水野節夫は¹、2000年に刊行した著書『事例分析への挑戦——‘個人’現象への事例媒介的アプローチの試み——』（以下、『事例分析への挑戦』と略す）で、「事例媒介的アプローチ（Case-Mediated-Approach）」[水野 2000: 8. 下線は原著]という新しい分析手法を提起し、「‘個人’現象を読み解くという狙い」をもった3つの事例分析のなかで、具体的な手法と手順を詳細に提示して、「個別事例を分析するということはどういう作業をすることなのか」という問いに、事例の個別具体的な内容を示して答えている[水野 2000: 3. 以下、本書からの引用はページ数のみを記す]。

本稿の課題は、この本で提示された3つの事例分析を素材にして、事例媒介的アプローチが生み出す成果の特性を確認し、「個別事例を分析するということはどういう成果を示すことなのか」という問いに答えることである。以下では、まず『事例分析への挑戦』の概要を示しながら、なぜ本稿が「成果の特性を問う」という課題を設定するかを説明する。

『事例分析への挑戦』の「序論」では、「…本書のエッセンスとぼく自身が考えているところを簡潔に言い表すとすれば、〈本書は、公刊されている三つの有限化された素材を対象にして、インパクト分析という視座から、‘個人’現象への事例媒介的アプローチを試みたもの〉ということになる」という水野自身による本書の説明が示されている[3]。そして、エッセンスとして示された4つの構成要素について、「1)なぜ《公刊されている有限素材》なのか、2)インパクト分析とは何か、3)なぜ‘個人’現象に注目するのか、4)事例媒介的アプローチとは何かという四つの問いに答える形で粗削りながらも全体としての本書の特徴を浮き彫りにしておくと共に、5)分析的観点から見た三つの事例分析の若干の特徴について言及するという形で各事例分析の簡単な紹介」[3-4]が行われる。本書の概要を捉えるうえで特筆すべきだと私が考える点は、上記の引用文にみられるように、本書は、常に「明確な問い」を提示し、それに「明確に答える」という姿勢で叙述が展開されているという点であり、また文章の主語、つまり表現する主体は、「ぼく」と明記されている点である。この2点は本書全体を貫く、重要な研究のスタイルになっている。

本論部分は、事例分析ごとに3部に分けられている。「第Ⅰ部『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究——三段階の分析の試み——」は440頁余りの本書の半分強を占める234頁にわたる議論が展開され、続く「第Ⅱ部 ある告白の再解釈の試み——何が彼女に自立志向性を放棄させて

しまったのか——」では精神分析の創始者S.フロイトが記述した症例の再解釈の結果が27頁分で提示され、最後の「第Ⅲ部 ある少女の日記に見る《生》の軌跡」では70頁分の事例分析の記述と、この事例で行った分析作業や分析手順の解説と実例を示した2つの「付論」に加え、作業過程で作成した分析表などの実物を掲載した4つの「付録」をあわせた85頁分とで構成されている²。このような頁の配分をみると、本書が個性的な構成をそなえていることがわかる。そして、この個性的な構成は、事例媒介的アプローチを提起する水野の研究の基本姿勢を表現していると私は考える。なぜなら、頁数の不均等は、特に第Ⅲ部の構成に明確にみられるように、「普通みられる事例分析の場合には、スペースの関係もあって、本論部分を——しかも多くの場合は短縮した形でしか——出版できるにすぎない」のに対し、「分析・検討した結果と共に、その成果が生み出されてくる主要な結節点ともいえるデータ分析諸局面についての基本情報も含めて」提示している結果であり[11]、「要するに、質的分析にたずさわる者は、自分の行っている分析の手の内をもっと見せるべきである」という主張を明確に反映したものだからである[20]。また分析事例によって、記述された頁数に大きな差がみられるのは、「分析視点がほぼ同じで、しかも同じく事例のいわば‘総なめ’的分析と言えるものであっても、素材の性質の違いによってその分析の成果がどれほど違った様相を呈することになりうるか」を示し、「そのことを通じて、《事例媒介的アプローチ》という分析手法が、単なる《金太郎飴》を生み出す代物ではなく、素材のもつ豊かな可能性を引き出しにくるものであるということが、分かってもらえるのではないか」[11]という意図にもとづいているからである。構成にみられる頁の不均等な配分だけみると「論文集の単なる寄せ集めを1冊にまとめたものにすぎないのではないか、という受けとめをする人がでてくるかもしれない」[3]が、この構成は極めて自覚的に行われたものである。それは「あとがき」で、水野が「《素材チェック》」と呼ぶ、「アイデアと素材との適合性のチェック」[430]を「徹底して行った実験的試み」[427]として本書を位置づけている点からも推測できる。こうした理解に立つと、本書は3つの事例分析によって具体的に提示するという形で事例の分析過程を明示化する挑戦、言い換えれば、実際に分析せずにただ抽象的な理屈だけを述べるやり方ではなく、論より証拠という形で実際に個別具体的な事例分析を提示することを媒介にして分析方法を実質的に示す仕方を徹底的に追究し、実行し、表現したという意味で、『事例分析への挑戦』と的確に名づけられているのだと私は解釈する。

では「序論」から、本論に相当する3つの事例分析の提示を経て導かれる、本書の「結論」とは何か。論文構成の素朴な枠組みの考え方を杓子定規にあてはめれば、本書には「目次」に示される形での「結論」部分が存在しない³。このため、事例媒介的アプローチによる事例分析への挑戦は、どのような成果を生み出したのか、あるいは成果をどのように評価すればよいのかといった問いの答えは、まとまった形で明示化されていない。これまで見てきた本書の構成と意図をふまえると、こうした問いの答えにあたる「結論」は、各論のなかに埋め込まれていると私は考える。したがって、個別具体的な3つの事例分析のなかから「個別事例を分析するということはどういう成果を示すことなのか」という問いの答えを発掘すること、これを本稿の課題にしたい。

1. 素材選択における特性と成果

本書で提示された事例分析は、すべて本や論文という形で「公刊されている素材」を対象にして行われたものである。具体的に使用された素材は、「中野卓編・著『中学生のみた昭和十年代』（新曜社、1989）、S. フロイト「エリザベート・フォン・R の症例」（1895）、笠原嘉編『ユキの日記』（みすず書房、1978）」[4] の3つである。なぜ、この3つなのか。

事例媒介的アプローチにおける素材選択は、まず「…ある特定の主題とその主題の事例と位置づけることができる具体的な素材」[8] という形で主題によって枠づけられる。本書の素材選択の枠になっている主題とは、副題に示された「'個人' 現象」である。したがって、3つの素材は、いずれも「ある特定の《個人》をその人なりの特徴をもった存在として成り立たせている諸事情や諸契機」[6-7] という「'個人' 現象」の記録を含んだ文書として選ばれている。しかし、主題との関係だけでは、なぜこの3つが素材に選ばれたのかという理由は明らかにならない。

たとえば、第Ⅰ部と第Ⅲ部の事例分析の素材は「日記」であり、この記録は探究される個人がみずから書いたという点から、行為者の視点・見方が記録されている素材だと容易に推測がつく。これに対して、第Ⅱ部で「ある個人の内的生活史を明かしてくれそうなデータ」[237] として選ばれたのは、フロイトが書いた「症例」の記録である。なぜか。

「第Ⅱ部 ある告白の再解釈の試み——何が彼女に自立志向性を放棄させてしまったのか——」は、『事例分析への挑戦』のなかでも、事例媒介的アプローチの成果を考えるうえで特に重要な意味をもってると私は考える。その理由は、「《個人学への事例媒介的アプローチ》という定式化を初めて公表した」[233] のが、この論文だからである⁴。なぜ、この論文で定式化されるようになったのか。それは、素材に対する「分析・解釈」の特性が、次の引用にみられるように、この論文で明確に意識されるようになったからではないかと私は推測する。つまり、この論文のなかで水野は、「ぼくは、自分が《分析・解釈志向》と呼んでいる立場…から、個人生活史研究をはじめとして具体的な個人の諸側面にスポットをあてながらその個人のありように可能な限り肉薄していくという研究——ぼくはこれを、研究の焦点を具体的な個人におくという意味で《個人学》と呼ぶことにしているが——を行ってきている関係もあって、個別具体的な事例をきちんと読み解けるかどうか、ということに非常に強い関心を持っている」[238] と述べたあとで、「なお、ここで再解釈という言い方をしているのは、すでにフロイトによって解釈された症例が存在するからである」[同] と述べているからである。ここで意識されているのは、同一素材に対する別な解釈の存在である。この点から第Ⅱ部の素材の選択は、異なった解釈の存在を意識して行われたと推測するわけである。そして、こうした目で見ると、第Ⅰ部で素材に選ばれた「日記」にも、先行する解釈が存在しているとも考えることもできる。それは素材である日記を編集した編者・中野卓の解釈である [18-19 参照]。この点を水野は次のように記している。「日記の断片性と生活史的物語との関連性という点についての中野さん自身の見解は次のようなもので、ぼくの見解とはかなり異なるように思われる」[22]、と。また第Ⅲ部の素材になった「日記」にも、先行する別な解釈が2つ存在していること

が指摘されている。

以上の点から、少なくとも事例媒介的アプローチの分析手法を具体的に提示しようとした本書にあっては、素材となる事例の選択は、主題による枠と同時に素材に対して別な解釈が存在している点も重要な選択の条件になっていたのではないかと私は考える。しかも、この別な解釈との関係を意識するということは、事例媒介的アプローチが生み出す成果の特性をどう評価するかという評価基準を考えるうえでも重要な意味をもっている。

水野は事例媒介的アプローチで公刊されている有限素材を使用する意図を、次のように述べている。「ぼくは《公刊されている有限素材》への分析対象の限定ということは、異論をその異論の根拠を明示しながら提示してることができる仕組みを保証しているという意味で、大変重要なことだと考えている」[5]。なぜなら「素材をどう読むか、あるいはどう意味づけるかは、読み手の側、分析・解釈する側の視点の関数なのだから、ある特定の素材を相手にしても、分析・解釈の仕方や視点は多様でありうるわけで、その意味ではそうした異論は大いにありうることなのだ」[5]。したがって、誰もが使用できる公刊された有限素材を事例分析することによって、「…ぼくの分析・解釈がどういう意味で説得力に欠けているのか（プレているのか）…、まさにそれゆえに、その異論とぼくの分析・解釈とはどちらの議論がより説得力があるのかわからないのか」という点を、焦点となる素材に即して開かれた形で相互検討することができることになるはずである」[5]とされている。

以上の点から、事例媒介的アプローチが生み出した成果のひとつは、素材を共有することで生まれる分析・解釈の多様性を積極的に評価し、開かれた相互検討によって、より説得力のある分析・解釈を相互に提出することに意義があることを明確に提起した点にあると私は考える⁵。

2. 個別事例を媒介にするアプローチの特性と成果

既存資料の分析は「事後解釈」として否定的に評価される傾向がある[マートン 1978: 86]。しかし、事例媒介的アプローチによる事例分析では、「…まず何はともあれ個別具体的な事例の解明こそが第一次の課題として設定されているということであり、ただだからこそ、主題の探求は、直接的にではなく、個別具体的な事例の本格的な検討という形で、またその限りでなされるという点」[8]が強調されている。つまり、「…個別事例の内に読み取れる範囲内でのみ主題の探求はなされる」[8]ことにむしろ事例分析の積極的な意義を見出している。

この考え方は、「…集合レベルでの一般化を目指す議論の素材として一事例のみを用いることについての異論」[333]としても提示されている。つまり、「…一般化的議論をする前にやっておくべきことがあるのであって、一つの事例をとりあげるのであれば、その事例に徹したときに見えてくるものを大切に、一事例内のデータの比較による事例特殊的なパターンの析出をこそ目指すべきではないか、ということである」[333]。そして、「ちなみに、一つの事例に徹したときに見えてくるものを大切にする、というのが、事例媒介[的]アプローチの一つの意味である」[333]ことが強調されている。ここで主張されているのは、一般化できないことに対する否定的

な評価ではなく、むしろ安易に一般化することなく、事例に徹底的に内属していく作業に対する積極的な意義である。それは、なぜか。

水野は「《個人学への事例媒介的アプローチ》」とは「個別具体的な事例をきちんと読み解いていくという形で、ある個人のありように可能な限り肉薄していくという接近の仕方」[261]を意味するとして、その際に2つの点が重要だと述べている。第1点は、「…分析・解釈の第一次的な課題は、あくまで分析者が分析・解釈の対象として設定する事例の解明に置かれているということ」[261]、第2点は「分析者が対象事例の全体像もしくは中心像（ゲシュタルト）とイメージしているものへの分析的・解釈的接近こそが目指されているということ」[261]である。ここで重要なのは、第2点の指摘である。

第2点で指摘されているのは、素材を媒介にして明らかにされる成果は、分析者の側の「視点」によって生み出されるものであるという特性である。この点は、関連素材を整理する主要な方法を具体的に説明した「付論1」の次のような記述でも確認できる。「まずは何といっても、何かまとめたいと思っている素材があることがここでの前提である。その際、素材を料理したい視点については、はっきりとした形でそうしたものを持っていた方がいいし、あるいはそれほどはっきりしていなくてもかまわない。というのは、素材とつきあっていこうという姿勢を持ってここで言う整理作業を行っていけば…、素材を料理したい視点にたどりつく、あるいはそうした視点が事実上できあがってくるはず、と想定しているからである」[335]。つまり、事例媒介的アプローチで想定されている素材の分析・解釈とは、「《投影（projection）》の論理の自覚的活用とでも呼べるものである」[275]。ここには分析・解釈の対象になる素材に一定の事象が記録されているという前提はおかず、むしろ分析者の積極的な読み解き方によって、素材から事象が浮き彫りにされるという見方が示されている。つまり、事例媒介的アプローチでは、「素材」と「視点」の双方の関係によって分析成果が多様なものになる点にこそ、事例分析の特性と意義がみとめられている。

そして、事例分析の成果には分析者の視点が大きな影響を与えるからこそ、水野は事例分析の分析手法を明示化する必要性を主張し、そのために実際に使用可能な分析手順や技法を提示したのである。つまり、「データの分析・解釈に内在する必然的な主観性を認めただけで、素材との関連でその主観性が発揮された箇所を可能な限り明示化できる仕組みを意識的に作り出すことによって、…その主観性を相互点検することができるはずだし、質的分析・解釈の水準を上げる上では、必要だと考えているということである」[229]。

以上のように、事例分析では分析者の主観性の介在が必然的であるという点を前提にしているがゆえに、事例媒介的アプローチでは徹底的に個別具体的な素材に内在すること（個別事例に徹すること）で、素材による主観性の制御が果たされるとする見方を提起した点が成果である。そのことによってまた、分析者が関心をもつ主題を「思弁的（speculatively）ではなく経験的に（empirically）」把握することが可能になる [7]⁶。

3. 「分析・解釈」の意味とインパクト分析の成果と特性

事例媒介的アプローチによる事例分析の手続きの特性を理解する鍵は、水野が「分析・解釈」という形で中黒によって注意深く2つの用語を区別して併記している理由を理解することにあると私は考える。たとえば、「このアプローチにおけるデータ分析の基本姿勢」の説明でも、「…分析・解釈枠組みの活用の仕方という観点から言えば、…分析・解釈枠組みというものは、基本的には、データや素材に対して‘あてはめ’ていくものではなく、データや素材の理解を深めるために動員してくるものだ」[9]とされ、「これをぼくは、分析・解釈枠組みの動員原則と呼んでいる」とし、「分析・解釈枠組みの動員原則」を太字の強調表示にしているからである。

しかし、本書のなかでは「分析・解釈」の意味について明示的な説明はなされていない。そこで、「分析・解釈」によって何が意味されているのかを理解するために、水野の『『ポーランド農民』の実質的検討に向けて」[水野 1979]（以下、「農民ノート」と略す）論文の概略をたどることにした。この論文は、トーマスとズナニエツキの『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』（以下、『ポーランド農民』と略す）を全体としてどう把握するかという問題を提起し、この大著を捉えるうえでは「…〈単なるモノグラフではない〉と同時に〈モノグラフでもある〉という二重性に留意することが、一つの重要な視点として浮かびあがってくる」[水野 1979: 24] ことを、2200頁を越える著書のなかで使用された用語の分布を確認する作業によって証明し、さらにこの2重性を生み出している具体的な鍵として、記録データに加えられた「コメント」の働きを指摘したものである[水野 1979: 28]。

水野は『ポーランド農民』がもっている性質は記録データに加えられた「コメント」によって規定されているという仮説を提起し、『ポーランド農民』で使用された膨大なデータの使い方を精査して[水野 1979: 44-45]、記録データとコメントが密着しているか否かと、解釈枠組と関連づけられているか否かという2軸の組み合わせによる4類型を設定して、それぞれの類型に属するコメントを具体的に検討したうえで、記録データと解釈枠組が最も緊密に関係しているコメントに焦点を絞って、後述する理論図式群と解釈図式群の使われ方に注目した5つの下位類型を設定した。そして、『ポーランド農民』にみられる「〈純然たるモノグラフ〉と〈一般的理論化を志向するモノグラフ〉」という2重性の存在を、この5つの下位類型の関係を使って鮮やかに定式化している[水野 1979: 55]⁷。

この時、水野は〈単なるモノグラフではない〉という水準のコメントを産み出す解釈枠組を「理論図式群 (theoretical schemes)」と呼び、〈モノグラフである〉という水準で使われる解釈枠組を「解釈図式群 (interpretative schemes)」と呼んで区別した。理論図式群と呼ぶのは〈単なるモノグラフではない〉という水準の解釈枠組での記録データの取り扱い方は、「…あくまで理論化のためのデータにすぎないのであって…ある特定の社会や社会集団にのみ妥当する性格のものではなく、そうした水準をこえて普遍的に妥当する理論を志向するものだからである」[水野 1979: 37]。つまり、記録データは理論図式群との関係では、一般化を志向する理論の例証として扱われているに過

ぎない。これに対して〈モノグラフである〉という水準で使われる解釈枠組が解釈図式群と呼ばれるのは、「モノグラフの特殊性を踏まえつつ、その全体像を描き出すことのできる道具立て——つまり、モノグラフを統一的に解釈しうる枠組——ということ」であり、「…生の記録データを生かしつつ、それらを相互に関連づけ、位置づけながら、統一的な像へと結晶化させていきうるだけの内容を備えた解釈枠組」だからである〔水野 1979: 37-38〕。つまり、ここでの記録データは全体のなかの部分として位置づけられ、モノグラフを構成する断片として意味づけられ、説明のなかに組み込まれる素材として扱われる。

このように「『ポーランド農民』の実質的検討に向けて」〔水野 1979〕で、水野は膨大な著作の緻密な検討を通して、理論の実質を支えるコメントの特性を生み出している理論図式群と解釈図式群という2つの解釈枠組を区別する仮説的視点を導入することで、人間的記録を利用した『ポーランド農民』のなかから、モノグラフと理論構築の関係に含まれている記録データの扱い方の2つの異なる志向性を具体例に即して明らかにした⁸。そして、ここで得られた2つの異なる解釈枠組みについての見方が、その後の著作で使われている「分析・解釈」という独特な表記に込められた考え方になっているのではないかと私は推測する。

この点をふまえてみると、事例媒介的アプローチにおけるデータ分析の主眼であるインパクト分析は、「理論図式群」による素材の分析と「解釈図式群」による素材の解釈を結びつける作業として捉えることができることになる。そこで次に、この仮説的な枠組みを使って、実際に提示された3つの事例分析の成果と特性を検討することにしたい。

4. ‘個人’現象の読み解き方の成果と特性

‘個人’現象とは、「ある特定の《個人》をその人なりの特徴を持った存在として成り立たせているもの」〔7〕を意味する。そして、この主題に接近するために選ばれた3つの素材の事例分析の成果は、実際には極めて具体的な内容とともに記述されている。したがって、以下では成果の記述の仕方について、形式的な特徴を書き出しながら何が成果として示されているかという点について、私の解釈を示したい。

第Ⅰ部の『中学生の日記』を素材にした分析では、‘個人’現象は「小括」の部分で「中野さんの傾向もしくは傾向に関連のありそうな諸特徴」〔219〕として、40の諸特徴が一覧表で示され〔221〕、これらの諸特徴を踏まえて、「‘中野さんらしさ’とぼくが考えているところを…三つの観点からまとめ」ている〔222〕。第Ⅱ部の「エリザベート・フォン・R嬢の症例」の事例分析では「3)ある告白の再解釈の試み」で、「エリザベートという個人の《〈生き方〉を探る》という点、ならびに彼女とその〈生き方〉への《インパクトを探る》という点」〔259〕から、「〈自立〉を志向した一人の女性が、にもかかわらず、エロスのものとの関連で、その志向性を放棄せざるを得なくなっていく過程」が「三つの契機＝傾向」の複合が形作る構図の変容過程として提示〕されている〔242〕。第Ⅲ部では「7)小括」で15期に区分された時期について、「各時期のいくつかの特

徴を浮き彫りにする形でユキにおける《生》の軌跡を跡づける」作業が行われ、『ユキの日記』に現れている限りで、ユキという一人の個人のありようの諸特徴」[333]が記述されている。

いずれの事例分析も、膨大な文章でもある素材に対して、「…ここでの整理事業が、(i) '客観的'なものではありえないということを十分承知の上で、(ii)目の前にある混沌とした素材に何とか見通しを与えられないものだろうか、という切実な関心につき動かされながら、素材を可能な限りまとめあげていくことを目指す」[338]して行われた成果である。

この整理事業の前提になっている見方の特徴は、「混沌とした素材」という点に明確に示されている。つまり、素材の分析作業とは、この混沌とした素材のなかから一定のまとまりを見出すことを意味する。そして、このまとまりは、「解釈図式群」と「理論図式群」を組み合わせることで適切に活用することによって見出されると考えられる。例えば、「…第Ⅰ部全体は、…分析者の側の統合化の視点の設定の下に、『中学生』のテキストの中に読み取るか読み込むことができるとされる”状況証拠”を積み上げてくるという形で執筆されている」[19]とされているように、実際の分析者の側の統合化の視点が、どのような図式群の組み合わせ方によって有効なものになるかは、素材の性質に左右されるため、事例分析の内容に即した検討が必要である。

ただ分析の具体的な内容を捨象すれば、3つの事例分析は、いずれも個人の「傾向（くせ）」あるいは「主体的契機＝傾向」[240]という形で「個人」現象を明らかにしているといえる。それは、ある特定の個人が表現した素材から反応傾向を具体的に定式化したものである。それは、例えば「ユキ的個性」や「喘息のユキ的屈折」[346]と表現されているように、徹底的に個人の傾向を意味する「事例特殊なパターンの析出」[333]として示されている。

この個別具体的な素材に記録されたパターンとは、生きているその個人の存在を事実上方向づけているような規範以前の反応として表現される、その人らしさを生み出す習慣や格率でもあったと考えられる。そうだとすれば、「個人」現象への事例媒介的アプローチによって示される成果は、万人が接近可能な素材を使用して、多様な個人に肉薄して根拠を示せる形で理解する視点を与える点に特性と意義があると考えられる⁹。

5. 結論

事例媒介的アプローチによる個別具体的な事例分析は何を生み出すのか。生み出されるのは、分析した素材を媒介にして現象を見る統一的な視点である。つまり、個別具体的な事例分析の結果には、対象になった事例の具体的な個別的内容の理解とともに、そこに含まれる個別具体的な事例を把握することができるひとつの視点も示されている。そして、この視点は、「…アモルフな形であれ、分析者が見てみたいと思っているもの、漠然としながら実感レベルで感じとっているもの、そうしたものをより鮮明な形に変換していく際の媒介装置としての有用性」[229-230]をそなえた視点として、他の素材の把握にも資する可能性をもっている。この対象を統一的に見る見方という意味での理論の提示こそ、事例媒介的アプローチによる個別具体的な事例分析が生み出す成果であ

り、事例に内在しながら、その個別性を超える可能性を内包している点に特性と意義がある。

そして、以上のような特性と意義をもつ『事例分析への挑戦』という素材には、のんびりとした自然体で記録にむかい、納得のいくまで繰り返し問いかけることで、世界をその傾向のままに開示しようとする、著者・水野節夫の個性的な研究のスタイルが示されていると私は解釈する。

注

(1) 論文という性質上、敬称は省略させていただきますが、貴重な執筆の機会を与えられた水野節夫氏には、これまでの惜しみないご教示の数々とともに深く感謝申し上げます。

(2) 本書は、井出裕久が指摘するように、国内外で新たな研究潮流となりつつあった「生活史研究とその多様な展開」[水野 1986] に対して、先行研究を渉猟して問題別の分析作業を行って明解な見通しを与えた画期的な論文のなかで、水野自身が指摘した「生活史研究の破産を宣言している」[水野 1986: 151] とみなされる 3 つの批判的評価に対する一定の解答として位置づけることができる [井出 2010: 65]。水野が指摘した生活史研究に対する 3 つの批判的評価とは、第 1 に「技法上の進歩がない」点、第 2 に「社会学的一般化は不可能である」点、そして第 3 に「分析と解釈が不足している」点であった [水野 1986: 151]。そして本書『事例分析への挑戦』は、第 1 点については事例媒介的アプローチという分析技法を新たに展開することで、第 2 点については 3 つの事例分析によって具体的な資料の分析・解釈を提示して、第 3 点については事例分析の研究目標を明確化することで一般化志向に対する異論を提起する形で、それぞれに解答したとみなせる [水野 2000: 8-11]。

この 3 つの論点が事例研究についても重要な論点であることは、[水野 2017a] でも確認できる。特に明確に主張されているのは、事例研究の特性を自覚したうえでその特性を活かしていく、「自然体」での事例研究を進めること [水野 2017a: 453] の重要性である。

(3) 佐藤健二は自著の構成を説明するなかで、「『社会科学の論文には明確な『問い』と論証された『結論』だけがあればよいという、一部で主張される単純な考えに少なからず違和感をもっていた」とし、この「理想が間違っているとはまったく思わない。しかし、自分が出した結論だけ届けばじゅうぶんだというのはどうだろうか」と指摘し、「資料とすべきものの広がり」と共有のしかたが、研究における論証という実践の奥行や結論の重みを支えている」としている [佐藤 2016: 410-411]。事例研究における分析者の記述と資料の配置の問題は、生活史資料の作品化（あるいは「コンテクストづけ」）の仕方の問題として水野が具体的な研究事例を示しながら、「解釈・分析志向」と「編集志向」とにタイプ分けしている [水野 1986: 170]。『事例分析への挑戦』は、「調査者もしくは研究者が明示的な形で生活史資料あるいは〈作品としての生活史〉の解釈・分析にのりだしていくタイプ」の「解釈・分析志向」にあたる。水野は「ここで注意しておきたいことは、分析・解釈志向と編集志向とは論理的になんら矛盾しないということ、にもかかわらず経験的には両立しがたいものらしい、ということである」[水野 1986: 170]。なお下線は傍点による原文の強調という重要な問題を提起している。2 つの志向の両立困難を資料の加工の問題として捉える『生活記録の改変 (contamination)』の連続体モデル」という立論の仕方もある [有末 2012: 145-146]。

- (4) 「事例媒介的アプローチ」の生成過程は次のように説明されている。「…第Ⅰ部の元になる論文執筆の作業を進めていく過程で自分自身にとっても徐々に明らかになってきたことは、ぼくが研究目標として言語化してきたものと実際の研究作業から浮かび上がってくる事実上の研究目標との間に微妙なズレが見いだされたということであった」[232]。ここには、このアプローチが「個人学」という研究目標と緊密に関係していることが示唆されている。
- (5) 文章に表現された内容をどう評価するかという問題は、「知識の検証問題」[盛山 2017: 5]に相当する。この点で、事例研究の実質的な評価基準として示された「相互検討」と「説得力」を、「公共性」という観点とどう結びつけて考えるかは重要な論点である。この点については[玉野 2008: 200-203]を参照。また事例研究にかかわる領域のなかで提起されている「研究の意味問題」も少なからず、この点に由来するものと私は考える。この点については例えば、[桜井・石川 2015; 野上 2015] 参照。
- (6) この発想は、価値前提と価値自由の考え方を、素材の扱い方という水準で具体化したものだと考えられる。重要な点（つまり、価値のある点）に強調点を打つという操作は、事実上、強調点を打つ素材の部分に制約されている。素材のないところでは強調点は打てないからである。どの部分に価値があるかは、強調点の打ち方によって表現されるが、素材そのものに強調点が付されているわけではない。この点は[井腰 2016] 参照。
- (7) 『ポーランド農民』という膨大な著作を全体としてどう評価するかについては、今日でもなお2つの方向がある[森岡 1991; 桜井 1998]。水野は「農民ノート」のなかで、モノグラフとしての側面を評価し、こうした研究方法を具体化することを企図していたものと考えられる。この点で、『事例分析への挑戦』は、この研究の延長線上におくことができるのではないかと、というのが本稿の仮説的な解釈である。
- (8) ここで採り出された「理論図式群」と「解釈図式群」は、作田啓一が、ふたつの事実の関係を表わしている「法則命題」とものの見方(perspective)を示した「視点命題」と名づけた命題の区分にほぼ相当するものと私は考える[作田 2011: 411]。法則命題は経験に照らして、この判断が正しいかどうかを問うことができるのに対し、視点命題は経験に照らして真偽を問えず、経験を理解する上での説得力だけが問われると指摘している[作田 2011: 411]。この区別は、社会理論の特性を理解するうえで極めて重要である。視点命題は、法律のように社会現象を理念に照らして「どのようにみるべきか」という見方を指示する規範として使用されている場合と、社会現象に「どんな意味があるか」を理解可能にする見方を記述した概念として使用されている場合があるからである。いずれのばあいにも、命題の真偽を経験的に判断できない視点命題に対する評価は、社会学を経験科学として規定する場合に繰り返す争点になっている。この点からも、『事例分析への挑戦』が提出した成果をどう把握するかは難しい課題である。ただ経験の捉え方や評価の仕方の多様性を生み出す見方は、正解の一つにしてしまう見方よりも望ましいという立場に私は立つ[見田 1982: 226-229参照]。なお注(5)も参照されたい。
- (9) 「傾向(くせ)」の解明事例として[佐藤 2015: 6-31]も参照。ここで示された成果は、現象学的社会学がレトリックの水準で例示するにとどまっていた何かを経験的水準で把握したものだと考えられる。現象学的社会学の学史的特性は[水野 2017b: 326-328] 参照。なお茨木竹二は M. ヴェーバーの歴史分析における因果性判断では「一般的に確かな経験的知識」が使用されている点を指摘している。「傾向(くせ)」は個人にみられる「よく繰り返された(類型的)事実」[茨木 2008: 151-156]とも考えられる。

参考文献

- 有末賢, 2012, 『生活史宣言』, 慶応義塾大学出版会。
- 茨木竹二, 2017, 『「倫理」論文解釈の倫理問題』, 時潮社。
- 井出裕久, 2010, 「水野節夫『事例分析への挑戦』」, 小林多寿子編『ライフストーリー・ガイドブック』所収, 嵯峨野書院, pp.62-65。
- 井腰圭介, 2016, 「モノグラフとしての『倫理』論文の特性と意義」, 『社会学論叢』(日本大学社会学会), 第185号, pp.9-22。
- マートン, R. K, 1978, (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳)『社会理論と社会構造』, みすず書房。
- 見田宗介, 1982, 「価値空間と行動決定」, 同『現代社会の社会意識』所収, 弘文堂, pp.209-241。
- 水野節夫, 1979, 「『ポーランド農民』の実質的検討に向けて」, 『社会労働研究』, 第26巻, 第2号, pp.17-64。
- 水野節夫, 1986, 「生活史研究とその多様な展開」, 宮島喬編『社会学の歴史的展開』所収, サイエンス社, pp.149-208。
- 水野節夫, 2000, 『事例分析への挑戦』, 東信堂。
- 水野節夫, 2017a, 「事例研究の可能性を探る」, 『看護研究』, Vol.50, No.5, pp.447-454。
- 水野節夫, 2017b, 「文庫版訳者あとがき」, ピーター・L・バーガー(水野節夫・村上研一訳)『社会学への招待』所収, ちくま学芸文庫, pp.323-329。
- 森岡清美, 1991, 「三, 社会学における個人的記録の使用」, 同『決死の世代と遺書』所収, 新地書房, pp.251-268。
- 野上元, 2015, 「社会学が歴史と向き合うために」, 野上元・小林多寿子編『歴史と向きあう社会学』所収, ミネルヴァ書房, pp.1-21。
- 桜井厚, 1998, 「トマス, ズナニエツキ『生活史の社会学』」, 見田宗介他編『社会学文献事典』所収, 弘文堂, pp.46-47。
- 桜井厚・石川良子編, 2015, 『ライフストーリー研究になにができるか』, 新曜社。
- 作田啓一, 1980, 「付論 社会学的命題の構造の分析」, 作田啓一・井上俊編『命題コレクション 社会学』所収, ちくま学芸文庫, pp.409-421。
- 佐藤健二, 2015, 『柳田国男の歴史社会学』, せりか書房。
- 佐藤健二, 2016, 『浅草公園 凌雲閣十二階』, 弘文堂。
- 盛山和夫, 2017, 「公共社会学は何をめざすか」, 『社会学評論』, No.269, pp.2-24。
- 玉野和志, 2008, 『実践社会調査入門』, 世界思想社。